

ご利用にあたって

本ページに掲載している解説パネルの文章・画像・図版等の著作権その他の権利は、当館または各権利者に帰属します。

著作権法上認められる場合を除き、許可なく複製・転載・改変・配布・ウェブサイト等へ掲載することはご遠慮ください。

利用を希望される場合は、事前に当館までお問い合わせください。

明治大学平和教育登戸研究所資料館

命令じられた



明治大学平和教育
登戸研究所資料館

2025 11.26 WED — 2026 9.26 SAT

10:00-16:00 入場無料



主催：明治大学平和教育豊戸研究所資料館
後援：川崎市、川崎市教育委員会

ごあいさつ

明治大学平和教育登戸研究所資料館は、2010（平成 22）年 3 月 29 日の開館以来、今日までに 10 万人以上の皆さまにご来館いただき、大学内外から多くの反響をいただいております。

このたび本資料館では、《その時、わたしたちは戦うことを命じられた―登戸研究所と本土決戦体制―》と題して第 16 回企画展を開催するはこびになりました。

80 年前（1945 年）、日本はまさに本土決戦に突入しようとしていました。すでに 20 万人もの犠牲者を出して沖縄がアメリカ軍に占領されていました。日本軍は、沖縄戦の教訓を最後の決戦である本土決戦に注ぎ込もうとしていました。6 月には「義勇兵役法」が公布され、15 歳から 60 歳の男性、17 歳から 40 歳の女性が日本軍を補助する任務に就くことが定められました。

国民義勇隊と呼ばれたこれらの人々は、本土決戦の戦闘が始まると、軍隊の補助だけでなく、国民義勇戦闘隊の隊員として戦闘に参加することが定められていました。本土決戦が起これば、男女を問わず多くの人々が、否応なく戦うことを命じられたのです。

一般の国民は、国民義勇戦闘隊の隊員、別名「国民抗戦員」と位置付けられ、偵察や破壊工作、さらには捨て身の対戦車戦闘にまで投入されようとしていました。

今回の企画展では、本土決戦体制下の登戸研究所の活動を解明し、研究所のどのようなセクションが本土決戦のために選ばれて移転したのか、移転後にどこで、どのような兵器・資材の開発を重点的に進めたのかを明らかにします。そして、大本営陸軍部（参謀本部）が作成した戦闘マニュアルである「国民抗戦必携」を基に、日本陸軍が構想していた老若男女を問わず国民義勇戦闘隊に編成してゲリラ戦（実態は玉砕戦）を展開していこうとする本土決戦計画も紹介します。また、終戦時に出された命令「特殊研究処理要領」によって、何よりも先に登戸研究所の存在が消されようとしたことも明らかにします。

登戸研究所を通して 80 年前の本土決戦体制というものの実態に触れていただきたいと思います。

2025 年 11 月 26 日

明治大学平和教育登戸研究所資料館長 山田 朗

第1章 本土決戦の前夜

1944 1945

— わたしたちが戦うことを命じられるまで —

1945年6月、義勇兵役法が公布されました。15～60歳の男性、17～40歳の女性が国民義勇戦闘隊として編成され、老若男女を問わず全国民が米軍との戦闘に備えることを命じられたのです。なぜ、このような極限の決断に至ったのでしょうか。

その始まりは、1944年7月、サイパン島の陥落でした。日本本土が爆撃圏内に入り、都市部の壊滅が現実となったとき、政府と軍は「最後の戦い」に備え、大本営や政府機関、軍需工場の疎開を急ぎます。

登戸研究所もその渦中にありました。参謀本部との協議の末、登戸研究所は疎開を決定します。しかし、その目的は単なる研究活動の継続にとどまりませんでした。「最後の戦い」の後方支援を行い遊撃戦の指揮を執ること、そして松代に移転する大本営を守るという重大な使命が課せられていたのです。

この章では、軍全体の動向と登戸研究所幹部・大月陸雄大尉の日記を手がかりに、疎開の経緯と本土決戦体制の実像を追います。そして、国民が「戦うことを命じられる」時代へと進んでいった

その決断に至る 道筋をたどります



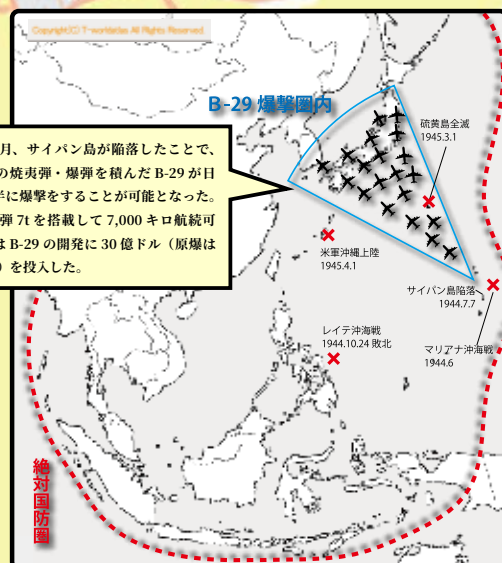
サイパン島陥落



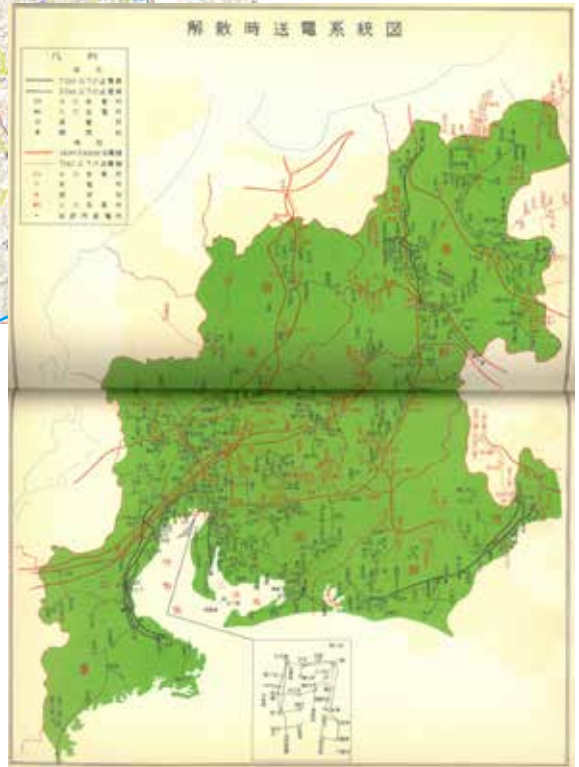
松代大本営工事



登戸研究所疎開



1944年6月以降のアジア太平洋戦争戦況図
山田朗『昭和天皇の軍事思想と戦略』（校倉書房、2002年）を基に資料館作成
戦況が悪化していく中、日本本土への空襲を防ぐため「絶対国防圏」を設け、大本営は圏内を死守する作戦方針を持つが、サイパン島が陥落し本土の大半がB-29爆撃圏内となる。これ以降、本土内は本格的な空襲を受けることとなる。



(国土地理院地図 GSI Maps を利用し作成)

水力発電所名	最大出力	会社名
高瀬川第三	2 万 3, 400kW	日本発送電
姫川第二	1 万 3, 280KW	中部配電
中房第四	6, 700KW	中部配電
高瀬川第五	6, 300KW	日本発送電

なぜこの地域が疎開先に選ばれたのでしょうか。登戸研究所には「く（怪力光線）号」などの強力な電波兵器を完成させることで、敵機から松代大本営を防衛する役割が与えられていたと考えられるため、その研究に適した地に移転する必要がありました。

電波兵器の研究と実験には大電力が必要です。「く号」兵器のほかに開発が検討されていた対空ミサイルも電波誘導方式でした。特に「く号」兵器は350MHzの電波を1,000kWで発信させるため、大電力が必要でした。しかし、1945年4月の段階で主要都市は空襲の打撃で電力供給もままならない状況でした。一方で、長野県内は空襲を受けておらず、特に水力発電設備は山間部に分散していたため、送電・変電設備はほとんど被害を受けず問題なく使える状態でした。先図が示す通り、北安曇は敵機から大本営を防衛する上で地理的に適した位置にあります。さらに県内でも有数の高出力発電所が集積していたため、大電力の確保が可能であったことから、この地域が第一科の疎開先として選定されたと考えられます。

①松代大本営とは

1944年2月「絶対国防圏」の最先端であるトラック島が潰滅し、さらに7月にはサイパンが陥落。B-29の日本本土空襲が確実視される中、本土決戦も視野に入れた戦争指導のため、大本営を東京から移転する計画が進められます。そこで選ばれたのが長野県松代町でした。選定理由は以下の通りです。



(国土地理院地図 GSI Maps を利用し作成)

- ・海に面しておらず、陸のほぼ中央に位置し、米軍上陸予想地点から離れている
- ・岩盤が硬く、地下壕をつくれば空襲の被害を受けにくい
- ・四方を山に囲まれ、工事に適する広い平地がある
- ・比較的労働力が豊富である
- ・長野県は人情が純朴で天皇を移動させるのにふさわしい風格・品位があり、「信州」は「神州」に通じ、防諜上からも適している

「マ（10.4）工事」：空襲への備えと本土決戦を見据えた移転計画

1944年11月11日、象山での発破を皮切りに地下壕の工事が始まり、続いて皆神山・舞鶴山にも地下壕が作られていきました。この工事に必要な電力供給のため、中部配電は1944年11月3日に工事を着手し、14日には竣工するという急ピッチの工事で松代仮送電線（3.4km、電圧3万V）および松代仮変電室（出力2,100kVA）も新設されました。

「マ（三・二三）工事」：本土決戦が現実味を帯びる中で

1945年3月、本土決戦が避けられないとみられる中、決戦の指揮を天皇が安全な場所で執れるよう、天皇の住居を舞鶴山に移す工事が始まります。また、決戦下の通信手段確保のため、松代の妻女山に受信施設、須坂に送信施設が作られました（6月には小布施と須坂に追加で送信施設を作る命令が出される）。

「マ（七・一二）工事：国体護持のための拠点へ

敗北が決定的になった戦争末期には、松代大本営は戦争指導というよりも、国体護持のための拠点として位置づけられるようになりました。そのため1945年7月、天皇自身に万が一のことがあっても、天皇制を維持していくために「三種の神器（鏡、剣、勾玉）」を安置する「賢所」壕を、舞鶴山と伊勢神宮を結ぶ弘法山の山腹に建設する工事が始まりました。また、皇太子（現上皇）と皇太后の居住も、善光寺北西部（長野市小鍋）の善光寺白馬電鉄トンネル跡に移す計画が立てられました。現・千曲市雨宮には決戦下でも紙幣、軍票や官報発行ができるよう、印刷局の壕を作る計画も立てられました。

工事名 / 開始日	目的	工事箇所・用途	場所	掘削長	壕数	敗戦時完成度
マ（10.4）工事 1944.10.4～	米軍からの本土空襲を避けるため、大本営を安全な場所へ移転	〈イ地区〉イ号倉庫：政府・NHK, 中央電話局など	象山	5,900 m	20 本	80%
		〈ロ地区〉ロ号倉庫：大本営作戦室など	舞鶴山	2,600 m	5 本	90%
		〈ハ地区〉ハ号倉庫：皇族用住居（後に食糧庫）	皆神山	1,900 m	6 本	80%
マ（3.23）工事 1945.3.23～	必至となった本土決戦に備え、大本営を指揮する天皇の住居を安全な場所へ移転	〈ロ地区〉天皇・皇后・宮内省用仮皇居	皆神山（筒井）		なし	90%
	決戦下の通信手段確保	受信施設	妻女山	180 m	3 本	65%
		送信施設	須坂		3 本	70%
マ（6.8）工事 1945.6.8～	〃	〃	須坂	工事用仮設建物のみ		
		〃	小布施			
1945.6.26	決戦下の戦争指揮	海軍省・軍令部	長野市安茂里	100 m		
マ（7.12）工事 1945.7.12～	敗戦が決定的になったため「国体護持」の拠点を建設	賢所（三種の神器安置場所）	弘法山	通路と坑口のみ着手	未着手	0%
		皇太子・皇太后の住居	長野市小鍋	計画のみ	—	—
	紙幣・軍票・『官報』印刷	印刷局	千曲市雨宮	計画のみ		

②登戸研究所北安分室（長野県北安曇地方）

北安分室では本土決戦にむけ、第一科長の草場季喜の下、敵機から大本営を防衛するため「く号」兵器と地对空ミサイルの研究開発が行われていました。

名称	設置場所	判明している所員	研究員	研究内容
北安分室本部	松川国民学校	草場季喜（分室長） 大槻俊郎（施設班長）	8 名	飛来する敵機を撃墜するための電波誘導方式ミサイルの研究・開発
池田研究室	北安曇農学校	不明	9 名	ロケット弾に電波受信装置を組み込み、飛行中に電波を受信しながら目標の敵機に向かって誘導する「電波誘導式対空ミサイル」の誘導装置（超短波受信装置）の研究・開発
会染研究室	会染国民学校	折井弘東（計画班長）	11 名	ロケット砲の基礎研究・開発
松川研究室	神戸原地区	不明	5 名	「く号（怪力光線）」兵器すなわち強力超短波の電波発信およびその電波を敵機に照射するパラボラアンテナの研究・開発

木下健蔵『消された秘密戦研究所』（信濃毎日新聞社、1994 年）より 1990 年に木下氏が元第一科技術中尉の寺尾信雄氏より聞き取った内容に基づく

電波誘導式地对空ミサイルの研究開発

陸軍の高射砲で飛来する B-29 を撃墜するのは困難だったため、電波誘導方式対空ミサイルが考案され、北安曇の四カ所にわかれて研究が行われていました。各所で研究が完成した段階で、一カ所に持ち寄って組み立て、実戦導入する予定でしたが、終戦までに完成することはありませんでした。疎開の時期は、研究



北安分室でミサイルの実験に使用された模型飛行機（池田三四郎氏提供、木下健蔵氏複写）

所関係者が松川国民学校を訪れ、教室や炊事場の借用を打診したという記録が同校の『学校日誌』の 45 年 6 月 4 日の項で見つけられるので、その頃に疎開して来たと考えられます。その他、体育館も使われたようです。

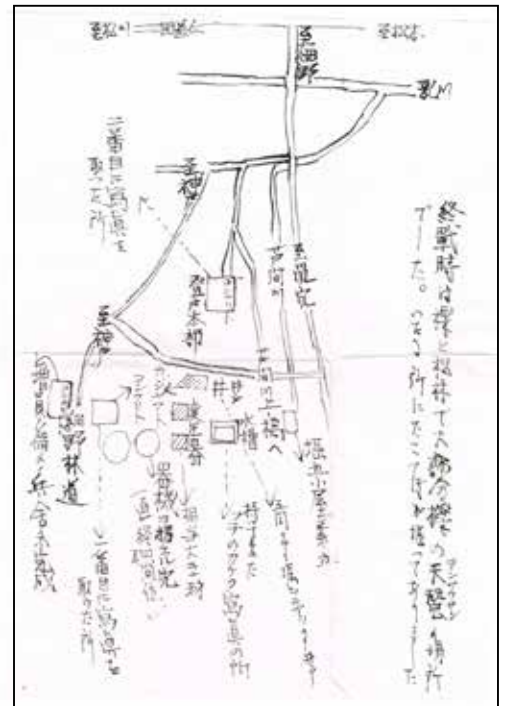
池田については記録が残っていないため確かな疎開時期は不明です。会染は、会染国民学校『学校日誌』によると、4 月 28 日「陸軍登戸研究所新設に当り宿直室小使室貸与」、5 月 22 日「登戸研究所員打合せの為応接室使用」の記録が残ります。

研究がどこまで進んでいたのかを示す記録はほとんど残っていませんが、東

京工業大学教授で、超高周波工学の第一人者である森田清も北安分室本部に研究室を移したことがわかっていますが、研究器材が揃ったところで終戦を迎えています。なお展示されている「直流電流計」は北安分室本部で使われていたものです。

会染には、トラックで製作機械や旋盤を積んだ工作車が運び込まれたそうです。

1945年10月にGHQが北安分室を接收した際に校庭を掘り起こしたところ、太さ15～20cm、全長約2mのロケット砲の発射台三門が掘り出されました。



当時を知る地域住民が木下健蔵氏の求めに応じ1990年代に作図した北安分室地図（木下健蔵氏寄贈）

「く号」兵器の研究開発

1937年に登戸実験場が開設されて以来、決戦兵器として開発を求められ続けてきたのが「く（怪力光線）号」兵器でした。当初は強力な超短波を敵機や人体に照射することで撃墜・殺傷することを目的としていました。

本土決戦下の大本営を防衛するには、地上から敵機を撃墜する手段が必要とされ、対空ミサイルと共に「く号」兵器の完成が望まれました。しかし、人体を殺傷するほどの強力な電波を発信するのは技術的に困難だったため、その目的は断念され、最終的には飛行機の操縦を妨害することが目標となりました。

その方法として考えられたのが、飛行機のエンジンに使われている「点火装置（プラグ）」に強い電波を照射するというものでした。飛行機のエンジンは、火花を飛ばして燃料に点火することで動いています。その火花を作るのが「マグネット式点火装置（マグネトー）」です。これは、磁石の力を使って高い電圧を生み出し、火花を発生させる仕組みです。そこで、強い電波を当てることで装置の中に余計な電気（誘導電圧）を発生させ、動作を乱すことができるの



〈左〉北安分室建物の礎石（木下健蔵氏撮影、提供）、〈右〉神戸原のパラボラアンテナ台座（篠崎健一郎氏撮影、木下健蔵氏提供）



ではないかと考えられていました。つまり、電波の力でエンジンを止めるという発想です。

1945 年には、波長 80 センチ・出力 50kW の電波を使い、約 10 m 先の生物に影響を与える実験が行われました。実験ではウサギが使われ、その命をもって兵器の効果が確認されました。さらに、波長 80 センチ（350MHz）、出力 1,000kW の強力な電波を敵機に照射することが目指され、神戸原地区には変電所と、当時としては国内最大級の直径 10 m のパラボラアンテナが完成しましたが、終戦により計画は中止されました。なお、海軍も「く号」と同様の「Z 兵器」研究を行っており、静岡県島田市の牛尾山に実験場を作り、登戸研究所と同じく直径 10 m のパラボラアンテナを据え付けた時点で終戦を迎えています。



第二海軍技術廠牛尾実験場の電源室・発振室・パラボラアンテナ架台跡地（2014 年 5 月当館撮影、島田市教育委員会、島田宿・金谷宿史跡保存会調査協力）

③登戸研究所本部・中沢分室（長野県上伊那地方）

登戸研究所の主要部は長野県上伊那地方へ疎開しました。目的は、国民義勇戦闘隊が戦車などに肉薄攻撃を仕掛ける際に使用する特殊小型爆弾「ハハリユ」などを大量に製造することでした。疎開先は山裾の地形に溶け込む場所に点在し、米軍の猛攻を避けながら爆弾の補給や遊撃戦の指導を続けるための、地形を活かした配置でした。また、この地域は第五農耕勤務隊も配備されており、関東平野や遠州灘方面から進軍してくる米軍との地上戦に備えた重要な支援拠点としての役割が与えられていました。松代大本営を守るための指揮・連携の要として、この地に拠点が築かれたことがうかがえます。

農耕勤務隊とは 1945 年、本土決戦に備えて食料の増産や航空機用燃料（松根油）の採取を目的に、日本陸軍は軍令陸甲第 16 号「農耕勤務隊臨時動員要領」を発令し、5 つの農耕勤務隊を編成しました。

この動員には、朝鮮半島から補充兵として約 1 万 2,500 人の青年が参加しましたが、彼らには正式な軍人としての階級は与えられず、過酷な労働環境のもとで働かされました。食料不足の中、日本人よりも差別的な待遇を受けており、脱走者がいたことも地域住民の証言として記録されています。

一方で、地元の日本人女性が握り飯を差し入れるなど、善意に基づく交流も見られたことが証言から伝えられています。

1 隊は 10 中隊で構成され、標準的な編成は 1 中隊につき朝鮮人 250 名と日本人 50 名、計 300 名でした。

終戦時には多くの関連資料が焼却されたため、農耕勤務隊の実態は現在も十分に解明されていません。

名称	設置場所
第一農耕勤務隊	静岡県富士山麓
第二農耕勤務隊	茨城県・群馬県
第三農耕勤務隊	栃木県那須塩原
第四農耕勤務隊	愛知県
第五農耕勤務隊	長野県

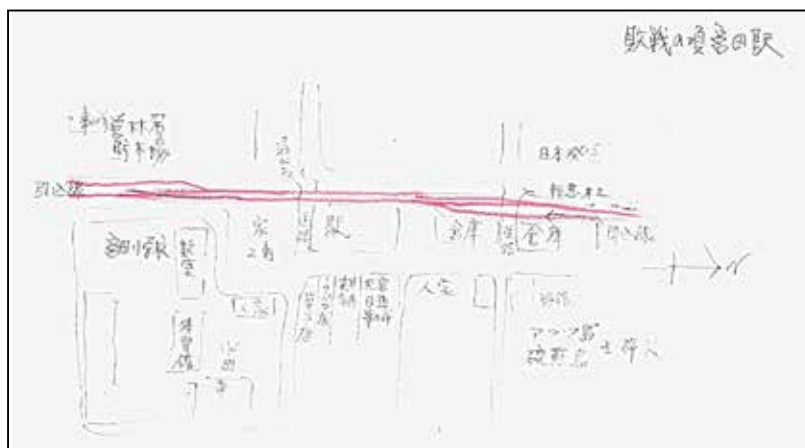
長野県強制労働調査ネットワーク編著・山田朗
監修『本土決戦と外国人強制労働』（高文研、
2023 年）より作成

名称	設置場所	主な所員と科	担当
本部	真慶寺 (上伊那郡宮田村)	篠田鏖中将（所長）、総務科	企画、庶務、人事、経理、医務、福利
中沢分室（研究部門本部） / 中沢製造所 / 第二工場	中沢国民学校 (駒ヶ根市中沢)	山田桜大佐（第二科長）、 第一科、第二科、第四科	挺身部隊用爆破焼夷および行動資材、宣伝資材、憲兵資材、簡易通信器材の研究と製造 / 工場では女子生徒が特殊小型爆弾「ハハリユ」製造
—	個人宅 2 階 (駒ヶ根市中沢)	丸山正雄少佐（第二科第五班長）	写真資材（簡易型ズーム撮影法、コピー機、野戦用現像キット）
赤穂分工場	赤穂国民学校 (駒ヶ根市赤穂)	中沢製造所の一部	特殊小型爆弾「ハハリユ」製造 / 第五農耕勤務隊第九中隊も
飯島分工場	飯島国民学校 / 飯島青年学校 (上伊那郡飯島町)	瀧塚句郎少佐（工場長）、 土方博少佐（第二科第三班長）	不明 ※毒物研究の可能性が高い
伊那村分工場	伊那村国民学校 (駒ヶ根市東伊那)	伴繁雄少佐（工場長、第二科第一班長）	信管研究、特殊資材研究、「ハ」及「ホ」研究

木下健蔵『消された秘密戦研究所』（信濃毎日新聞社、1994 年）より

本部（真慶寺・宮田村）

1945 年 3 月頃から真慶寺に本部が移転しました。境内のほとんどの畳がはがされ、板張りにして使用されたといいます。本尊を安置する内陣に隣り合わせの「室中の間」が登戸研究所長・篠田鏖中将と総務科長 / 第一科長・草場季喜少将らのための秘密の会議室となりました。また、疎開させた登戸研究所の極秘書類も保管されていました。現在でも真慶寺には登戸研究所の蔵書印が残っている書籍が約 50 冊あります。また、本部は資材受け取りの中心でもあったようで、真慶寺近くの元宮神社の舞台には砂糖・油・布といった、当時、人びとの生活では手に入れることが難しく



戦時中の宮田駅地図 2016 年 8 月当館の調査に応じた地域住民が作図したもの



〈手前〉真慶寺本堂の仏間と〈奥〉室中の間 室中の間は本尊の安置された内陣と隣り合わせになっていて、襖で仕切ることができる。秘密の会議に使用されたほか、最も秘密（2013 年当館撮影）

なっていた物資が大量に積まれていたという証言が残っています。宮田駅から駅周辺の倉庫までひき引き込み線がひかれ、さまざまな物資が運び込まれました。

中沢分室・中沢製造所各工場（駒ヶ根市中沢、赤穂）

この地区の国民学校（中沢・赤穂・伊那村）高等科 1～2 年生（現在の中学校 1～2 年生に相当）が動員され、各所の工場で缶に「研う」をつめた特殊小型爆弾「ハハリユ」が大量に製造されました。このことは 5 月 13 日付の宮崎周一（参謀本部作戦部長）の記録「作戦秘録」からも読み取れます。

「研う」とは粘土のように変幻自在の火薬です。「ハハリユ」は沖縄戦で護郷隊にも渡されたという証言が残っています。

「ハハリユ」製造に関する証言

中沢国民学校工場に動員された女学生（15 歳）①

第一工場は中割協議所で学校は第二工場だった。第一工場は火薬を詰める缶を伊那商業の生徒と「自分と」同年の男子が作っていた。それを自分たちの工場へ持ってきて、次のような手順で爆弾に作った。

- ・缶（5cm × 3cm × 15cm）を学校の河原で水洗いする
- ・男子がその缶の回りを、火薬を詰めても漏れないようハンダ付け
- ・火薬を計ってむすびにする
- ・それを充填作業する（缶の中へ角棒でトントンと隙間なく詰める）
- ・缶の回りの火薬をきれいにふき取り、隙間がないか確認し導火線を付け仕上げる

作業にも慣れ製品ができたころ、実際に爆発して使えるか実験をした。天竜川の今の穴山の浮島の河原でやった。将校が実験前日「いよいよ明日、お前たちが作ったものが成功するか実験だ。もし不発だったら兵隊さんが死んでしまう。その責任でお前の命もないと思え」と言われていたので、当日は皆で手を取り合って見ていた。そのことは心に染みついて今でも忘れられない。実験は無事成功し、みな大声をあげて喜んだ。

（参考：上伊那郷土研究会『伊那路』平成 18 年 8 月号）

中沢国民学校工場に動員された女学生（15 歳）②

「缶詰になっていて。このところに雷管みたいのが何か付いてる。でそこ触っちゃいけません、っていう。火点けなければ大丈夫なんですけれどもね。そこに火を点けて、なんか…投げる、爆弾ってなるのよ。

どの位、威力はわからないけれど、でも天竜川に行ってみみんなで並んで、威力を時々試すんですよ。そうするとかなり、火柱が…水柱が上がるもんですから、そこそこ威力があるもんなんだねってことで、みんな手を叩いて喜びましたよ。でも、子どもだから。でも、ほんとにあれ威力そんなに無いんじゃないかしら」（2012 年資料館聞き取り）



〈上〉天竜川の穴山の浮島俯瞰（2015 年資料館撮影）〈下〉穴山の浮島（2013 年当館撮影）

参謀本部作戦部長 宮崎周一中将
「作戦秘録」1945 年 5 月 13 日付の記述

一、登戸 爆薬、焼夷剤製作状況

爆薬 一六万 九月迄三分一 手持約一万

七月初ヨリ増加、疎開伊奈谷（中沢）三分二

篠山（小川）三分一

焼夷一六万 防水缶一万 防水マッチャー〇万

（軍事史学会『宮崎周一中将日記』錦正社、2003 年より）

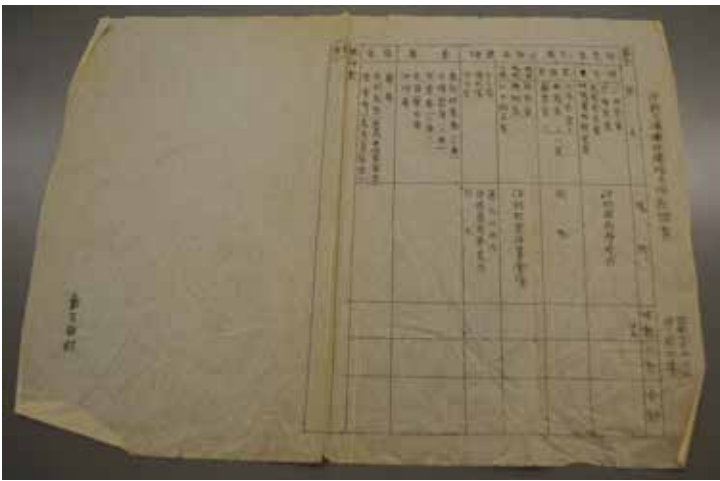
伊那村分工場

下図「伊那村工場構成建物及坪数調書」（1945 年 5 月 24 日作成）には、伊那村分「工場」とありますが、その内容より、工場ではなく研究を担当する部門だったことがわかります。主に伊那村国民学校や栗林集会所などに、研究室が 4 室、工場長（伴繁雄）室・庶務室・図書室を兼ねた庶務室 1 室、精密機械工場が 3 室、付属建物が 3 室、倉庫が 8 庫と宿舎 3 ヶ所が設けられる予定でした。

「ハ」研究室とありますが、「ハ」は敵の兵器や施設、人員に損害を与えるための破壊殺傷用の爆発装置、一定時間後に作動する時限式の爆弾、そして自身の身を守るための防御用器材の符牒です。遊撃戦用の特殊小型爆弾「ハハリユ」もこれに含まれます。

もうひとつの研究室「ホ」の詳細は不明ですが、陸軍省の『符牒に関する規約』によれば、特殊器材に分類される符牒です。ただし、「調書」には「ホ」研究室とは別に「特殊資材研究室」が設けられており、両者は異なる目的を持っていた可能性があります。そこで考えられるのが、毒ガス「ホスゲン」です。「調書」には、伊那村国民学校内に「ガス室」と「^{ようすい}揚水室」の設置が記されています。揚水室は、ホスゲンの製造や実験、^{ろうえい}漏洩時の対処、安全処理において重要な役割を果たす設備であり、こうした施設の存在は、毒ガスの研究が行われていた可能性を示唆しています。または「防毒」を意味している可能性もあります。ガス室で^{ばくろ}曝露実験を行い、揚水室で洗浄・除染が可能だからです。

特殊資材研究は、舞台用かつら師である月村鶴吉やマジシャンである柳沢義胤も伊那村に疎開してきているため、遊撃戦に備え、疎開前から継続して変装用資材の研究が行われていたことが考えられます。



「伊那村工場構成建物及坪数調書」（木下健蔵氏原所蔵）

区分	研究室	工場及び付属建物					倉庫	宿舎
	研究室	庶務室	精密機械工場				庶務版倉庫（2 庫） 工場倉庫（2 庫） 火薬庫（2 庫） 危険薬品庫 油脂庫	寿屋 共同宿舎（営内 居住者宿舎） 集会所（高等官 宿舎）
室名	「ハ」 研究室 「ホ」 研究室 信管研究室 特殊資材研究室	工場長室 庶務室 図書室 （まとめ て 1 室）	設計室 機械室 仕上組立室	火工場	揚水室	ガス室		
場所	伊那 [村] 国民学校	同左	伊那村栗林 集会所	善込山林内	伊那 [村] 国民学校	同左		
坪数	35							

「伊那村工場構成建物及坪数調書」（木下健蔵氏原所蔵）より一部書き起こし

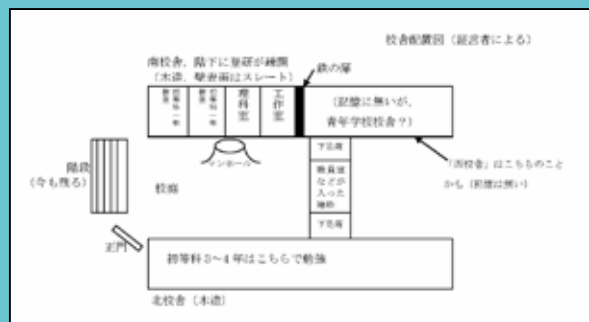
飯島分工場

飯島分工場に関する資料は特に残っていないため、何を行っていたかは不明です。ただし、飯島分工場の工場長だった瀧塚句郎薬劑少佐および上官の土方博技術少佐は「青酸ニトリール」の開発者であるため、ここは毒物兵器の研究開発部門の疎開先であったことが考えられます。戦後、伊那村分工場があった伊那村国民学校では、「毒入りチョコレート」を生徒が誤食する事件が起こりますが、これは土方が伴繁雄技術少佐に見本として渡したものでした。

飯島分工場に関する証言

飯島国民学校 4 年生だった女性のお話し

- ・飯島国民学校に登戸研究所が疎開してきた際、南校舎階下 4 教室を使用していた（工作室、理科室、初等科 1 年の教室が 2 教室の計 4 教室）
- ・登戸研究所のいた南校舎には近づいてはいけなかったと言われていた
- ・「小峰さん」（第二科第一班の小峰仁助工員カ？）が飯島村岩間というところに家族と下宿。本人は見ることがないが、奥様とは付き合いがあった。子どもは自分より一学年上だった
- ・登戸研究所が疎開してきて、気付いたら南校舎の校庭に土盛されたマンホールのようなものが作られていて、登戸研究所がいなくなったらいつの間にかマンホールのようなものも無くなっていた。マンホールは横から見ると富士山のような形、てっぺんはコンクリートの縁がぐるりと一周のぞいていた
- ・校舎の偽装について記憶がある。南校舎は壁面が白～クリーム色のスレートで出来ていた（内部は木造）が、そのスレートにコールタールのような黒い液体がかけられて、乳牛のぶちのような模様が付けられた。偽装の塗装作業は夜中に行われたのか、作業は見えていない。
- ・校庭に出ると、南風の強い日には薬品のにおいがただよってきた。
- ・登戸研究所が疎開してきたと言っても、登戸研究所の研究者はおろか、人影を見たことはなかった。
- ・登戸研究所が疎開してきたときでも、全校生徒は普通に勉強していた。（2015 年当館聞き取り）



「毒入りチョコレート」に関する証言

伊那村国民学校高等科 2 年生だった女性のお話し

「戦時中は動員で中沢の工場に行っていました。伊那村国民学校で作業をしたことはありません。しかし敗戦となったため、今度は伊那村国民学校で登戸研究所の後片付けを手伝うことになり、校庭に穴を掘って実験器具などを埋めていました。そのなかにチョコレートがあり、軍の方がそれを見つけ私たちに下さいました。それを知った八反田[一三中尉]さんという将校の方が、とても慌てて私たちを医者に連れていき、胃の洗浄をしたことを憶えています」（木下健蔵『消された秘密戦研究所』（信濃毎日新聞社、1994 年））

飯島国民学校校舎転用に関する行政文書

当校校舎転用ニ付申込有之候条左記事項具申申候成

※飯島国民学校長から長野県知事宛に提出した文書

- 一、校舎転用申請者 陸軍登戸研究所中澤製造所
 - 二、校舎転用の目的及其ノ用途 特殊兵器研究ニ関スル重要資材倉庫並事務所トシテ転用
 - 三、転用期間 自昭和二十年四月至昭和二十一年三月
 - 四、其他転用部分建物及其ノ延建坪数 別紙ノ通り
- 右ニ対スル意見 本転用ニ依リ教育上特別ノ支障ヲ来サズ貸与可能ト認ム

学校校舎転用ニ関スル件

※ 1945 年 5 月 19 日付長野県内政部長から飯島国民学校長に宛てた指示書

サキニ貴校舎一部ヲ陸軍登戸研究所中澤製造所ノ倉庫及事務室ニ転用ノ件ニ関シ具申相成候処右転用ノ儀ハ差支無ノ候ニ付管理者並ニ申請者ト細部協議ノ上三月二十六日教二三四号学校々舎転用ニ関スル件通牒ニ依リ学校々舎転用実施報告書ヲ遅滞ナク提出相成度追而校舎転用ニ当リテハ左記事項御留意ノ上実施相成度〈後略〉

1945 年 6 月 26 日付報告書〔飯島国民学校の校舎転用状況〕

一、陸軍の登戸研究所中澤製造所、研究室、兵器製造、事務室、倉庫 二〇〇坪 〈後略〉

※さらに 8 月には南校舎理科準備室、実験室など 3 教室 60 坪、田切分教場雨天体操室 35 坪、本郷分教場 3 教室の使用を登戸研究所は申請している（学校教育百年史刊行委員会『飯島町学校教育百年史』（1969 年）所収）

その他

駒ヶ根市中沢の原稚蚕養育所（現・原いきいき交流センター）にも登戸研究所が疎開して来たという証言が残っています。

国民学校1年生だった男性のお話し

「ここに来ていた兄さんたちは若い学者の人たちばかり。この近くの隠居にシミズ中尉がいました。その中尉がここの監督をしていました。姉さんはずっと付き合いをしていて、戦後も文通をしていました。シミズ中尉さんなんか、毎晩ビールを飲んでいて。当時、物がないうちに鮭缶、酒、お砂糖、これが十分にあって。赤穂の駅に貨物で登戸から物資が運ばれてきて、ここの兄さんたちがリアカーでそれを取りに行き行って[それを手伝って]。お礼に鮭缶と砂糖を頂くのが楽しみで。終戦後、鮭缶がたくさんあったので、リュックサック背負って中沢国民学校まで取りに来いってということで、けっこう分け前をもらいました。

ここには若い兄さんたちが12～3人ぐらいいたと記憶しています。[建物には]アンテナが立っていて。窓から覗いてみると、ピーピー、ピーピー1日中鳴ってた。

[兄さんたちは]この地域に貢献してくれてました。火事があったとき、兄さんたちが出てきて一緒に消してくれたり。私は昼休みにキャッチボールを教えていただいたり。それで、あのころ管制で電気がなかったから、電池をこの部落にくれました。『^{かく}角電池』っていう緑色のをけっこうこの辺りに配給してくれていました。だから私は[兄さんたちに]憧れました。ゆくゆくはああいう人になりたいなって。ラジオが壊れてここに持ってきたらみんな直してくれた。ここの工員さんたちはほとんど周辺の家に分宿していて。そんなこともあって、この集落の人たちは戦後もその人たちと付き合いがあった人が多い

戦後、[ここにあったものは]全部置いていきましたから。綿巻き線っていう線がものすごく束になっていて、三極モーター、二極モーター作るのが私たちの間で流行りまして。終戦の時に頂いたラジオはまだ持っています」

(2015年当館聞き取り)



原いきいき交流センターに飾ってある当時の原稚蚕養育所建物
(2015年当館複写)



敗戦後に作成された報告書には以下のように書かれています。上記証言からも、この場所では通信器材の研究及び製造がされていた可能性が高いです。

研究項目	終戦時の研究状況	
強力電波の超短波の基礎研究	超短波の強力発振集勢及之が効果に関し基礎的に研究し、之が性能の向上に努めつつあった	北安分室
簡易通信器材の基礎研究	制式通信機の整備隘路を補う為、「ラヂオ」部品等を以て製造容易なる通信器材に関し研究且一部製造しつつあった	[中沢分室]
爆破焼夷資材の研究	挺身部隊用の小型爆発缶・袋入爆薬及焼夷筒成型焼夷剤に関し研究し、且一部製造しつつあった	中沢分室、小川分室
挺身部隊用行動資材の研究	挺身部隊の行動資材として、登攀・渡渉・夜光掲示板・防水夜光時計・耐水「マッチ」を研究し、尚、補力資材として、携行口糧・精力剤及食料自活方法に関し研究し、且一部製造しつつあった	中沢分室、小川分室
写真資材の研究	簡易望遠写真撮影方法、複写装置、野戦写真処理用具に関し研究しつつあった	中沢分室
憲兵資材の研究	憲兵科学装備用指紋採取用具現場検証器材、理化学鑑識器材に関し研究し、且、製造しつつあった	中沢分室、小川分室
宣伝資材の研究	伝単撒布方法、携行放声装置、放声宣伝車に関し研究し、且、一部製造しつつあった	中沢分室、小川分室

④登戸研究所小川分室（兵庫県丹波市山南町）

陸軍は米軍が九州にまず上陸し、つぎに関東に上陸し、日本の勢力を東西に分断するだろうと予測します。それにあわせ、東西での決戦を支えるため、登戸研究所は関西方面にも分室を作ります。先に示した作戦部長の宮崎周一中将の「作戦秘録」の記述内容からは、遊撃戦用の爆薬製造拠点は、上伊那と兵庫県・小川に期待されていたこともわかります。

現・山南町の小学校校舎を摂取し、登戸からの機材などの運搬、工場建築中に終戦を迎えました。

⑤登戸研究所第三科（川崎市 / 福井県越前市）

登戸研究所北陸分廠

登戸研究所の第三科は、半数は川崎市生田の登戸研究所に残り、終戦の日まで偽札を製造し、上海に偽札を運搬していました。もう半数は福井県武生と栗田部（現越前市）へ4月より疎開を始め「北陸分廠」となります。同地域は明



(国土地理院地図 GSI Maps を利用し作成)

治期より紙幣を抄紙している歴史と技術があり、現在の日本の紙幣にも使われている白黒すかしの技術も同地の職人によって生み出された技術です。また、1940年、印刷局だけでは紙幣製造が間に合わなくなり、印刷局の求めに応じ、越前の製紙会社が「中国聯合準備銀行券(日本の傀儡政権の通貨、後に汪兆銘政権に吸収合併)」、さらに「中央儲備銀行券(汪兆銘政権の通貨)」を抄造し、その後印刷局指定工場になった経緯から、第三科の疎開先に選ばれたと考えられます。偽札製造の拠点を二か所に分けることで、米軍上陸後も中国へ偽札を運び続けられるようとしたことが伺えます。その目的は、本土決戦下の物資不足を解消するために中国での物資調達資金にすると共に、支那派遣軍総司令部経理部に渡していたという関係者の証言ことから、中国での工作に用いることが考えられます。ただし、登戸研究所から移動させた印刷機、彩紋機などを据え付けたところで終戦を迎えました。



北陸分廠本部（1997年吉田一法氏撮影）



製版・印刷のために接収した工場（1997年吉田一法氏撮影）



存在を隠された第三科

第三科は他の分室と異質であることが、下記の兵器行政本部作成の戦後処理資料「陸軍技術研究所之部 / 其 9 第 9 陸軍研究所」(1945 年 8 月 31 日作成) から出てきます。この報告書には北陸分廠のことも、川崎に残った第三科の活動も一切触れられておらず、隠されていたことがわかります。

1	任 務	超短波ノ基礎研究並ニ挺身部隊用資材、宣伝資材、建部尾資材ノ研究其ノ製造
2	所在地	本部 長野県上伊那郡宮田村 北安分室 長野県北安曇郡松川村 中沢分室 長野県上伊那郡中沢村 小川分室 兵庫県氷上郡小川村 登戸分室 川崎市生田
3	編 成	本部及北安分室、中沢分室、小川分室、登戸分室ヨリ成ル 本部 企画、庶務、人事、経理、医務、福利 北安分室 強力超短波ノ基礎 中沢分室 挺身部隊用爆破焼夷及行動資材、宣伝資材、憲兵資材並ニ簡易通信器材ノ研究及製造 小川分室 登戸分室 資材ノ収集上級官衛其ノ他トノ連絡及疎開後ノ残務整理

「陸軍技術研究所之部 / 其 9 第 9 陸軍技術研究所」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C15010410100、「昭和 2 0 . 8 . 3 1 陸軍技術研究所の部 陸軍兵器行政本部」(防衛省防衛研究所) より

土本義夫氏 (中野学校出身で、登戸研究所から上海まで偽札運搬と監督を行っていた) のお話し

■土本義夫氏について■中野学校卒業後、参謀本部から登戸研究所第三科へ出向。1944 年秋から 8 月 15 日まで 4 回、上海にあった「阪田機関」へ偽札を一度に 40 箱程度運んだ。ルートは船で神戸から釜山^{ぶさん}→北京^{ほくほう}→浦口→南京→上海。船は安全が確保できずに出航できない時もあり、一度の渡航に 1 ~ 2 カ月ほどかかった

「[最後に偽札を運搬したときの話] 船と列車で上海まで運んでその帰り、釜山で [8 月] 12 日と 13 と 14 日は [日本行きの] 船が出たんだけど、危ないっていうんでまた [釜山に] 引き返してきて。旅館に泊まって。今度は大丈夫だと思って船が出て、それで対馬に着いて。その時は優秀な向こう [恐らく中国にいた日本兵] の兵隊を二名、中野学校に入れるために連れてきたんだよね。それがワンワン泣き出してね。終戦になって敗けたって。そんなバカなことがあるかって言って。それで『本当だよ、外に出て点けたことのない境界灯が点いてますから』って言うわけ。それでそうだったですわ。だけど [彼らは] 私が連れてきたんだから『おし、何やってる、大丈夫だ』って言って。ワンワン泣いちゃって。」

(2011 年資料館聞き取り)



登戸研究所から運ばれた偽札を監理していた「華新公司」と偽札を利用して取引を行った貿易会社「民華公司」(どちらも阪田機関の一部)が入っていた上海の建設大樓
(1997 年吉田一法撮影、上海)



2. 松代大本営防衛ネットワーク

：群馬・浜松・登戸研究所の戦略的連携

松代大本営防衛のための配置

次の地図が示す通り、松代大本営を守るため、登戸研究所本部（中沢分室）、北安分室に加え、群馬県の各地や静岡県浜松市にも重要機関が配置されました。

群 馬

関東平野での決戦を見据え、
米軍進軍に備え重要機関を集結

浜 松

遠州灘からの米軍上陸を想定し、
日本軍東西分断を防ぐため部隊を配置



ポイント これらの防衛拠点、登戸研究所の疎開地と連動し、特殊兵器を用いた戦闘を展開できるようにしていた

第 13 方面軍と第 54 軍司令部

- ・第 13 方面軍は東海地方防衛のため 1945 年 2 月に創設。司令部は名古屋城跡に設置される
- ・その半分の兵力で編成された第 54 軍（1945 年 6 月 19 日編成）は、司令部を愛知県新城^{しんしろ}の県立新城高等女学校に設置
- ・この編成は、6 月 8 日の御前会議で決定された「皇土保衛」^{こうどほえい}「国体護持」^{こくたいごじ}に基き、松代大本営防衛を目的としていた
- ・所属の第 143 師団司令部は北東の静岡県・引佐町井伊谷^{いなさちょういいのや}に置かれ、浜名湖から天竜川にむかって展開した

▶ 浜名湖・天竜川が作戦上重要視され、松代防衛ネットワークの要となったことを示している

士官学校の疎開

- ・松代大本営にむかって南東側（長野）に陸軍士官学校、北東側（群馬）に陸軍予科士官学校（旧陸軍幼年学校）が疎開
- ・エリート士官養成学校で、関東平野決戦・松代防衛の両方に対応
- ・佐久地域では農耕勤務隊を編成し、士官学校生の後方支援を準備

秘密戦を担う中野学校

- ・松代方面の山際（富岡）に本校が疎開し、決戦時に秘密戦を展開
- ・後方に前橋地区特設警備隊を配置し、遊撃戦を想定
- ・遊撃戦指揮官の短期集中養成を目指し1944年8月に新設された二俣分校により、浜松～長野方面でも遊撃線を展開

毒ガス戦

群馬

- ・1941年12月より沼田市内には毒ガス戦の演習場や毒ガス事故に備えた病院が整備されていた
- ・疎開した第六陸軍技術研究所赤城分室ではロケット用ガス弾を研究
- ・沼田市内の高等女学校および中学校に陸軍気象部が疎開し、毒ガス使用時の風向き観測を担当

浜松

- ・1937年頃、天竜川河口に浜松飛行隊の毒ガス実験場を設置
- ・1944年、陸軍唯一の航空化学戦（飛行機による毒ガス雨下攻撃）の研究と訓練を行う三方原教導飛行団が三方原飛行場に開設
- ・1944年12月、天竜川下流右岸で卒業演習実施。実際にイペリットガス（持続性のあるびらん性ガス）を雨下および防毒訓練を行う

河川敷を行軍する一個小隊（50名程度）めがけてイペリットガスを液状にして散布

決戦兵器「け」の実験と研究

- ・浜名湖畔の浜松市舘山寺に「け」実験場」設置
- ・「け」は、1944年5月より野村恭雄大佐（後に少将）を中心に開発が進められる。艦船の熱源を自動追尾する爆弾で、特攻に代わる決戦兵器として期待。その期待値は下記の宮崎周一中将（参謀本部作戦部長）の日記からもわかる
- ・実験が浜名湖で行われたことは宮崎周一中将の記録からもわかっている
- ・学徒1300人動員を含む大規模研究が進められたが、完成に至らず敗戦

日付	内 容
1944年 12月27日	一、け 実験の結果 二十九日総合試験 浜名湖附近にて実行
1945年 5月24日	昨夕、野村少将 け 研究の進捗状況について報告アリ、理論的に成立す、実兵器としてなお1～2ヵ月を要すと、実はさらにさらに時を必要とすへし / 先に神光に関する報あり 共に国家を救う神風なり 神に祈って戦機に間に合う如く成功せんことを
7月14日	け の6月の総合判決、頭脳部は理論的によきも実行上に未し、11月戦力発揮を目途とし努力す、来春には命中率あるへし / 科学技術の根本的研究の態度 米国の科学技術を見ての謙虚なる態度を要す